雲南省永寧郷ナシ族（モソ人）の伝統的集落・住居の空間構造とその変容

- 居住地整備事業・観光開発事業後の 2 つの集落の変化 -

RESEARCH ON TRADITIONAL SPATIAL STRUCTURE AND SPACE CHANGE ABOUT NAXI VILLAGE AND RESIDENCE
IN YONGNING TOWN, YUNNAN PROVINCE

- Spatial change from two villages after residence improvement project and tourist development -

Xu FENG and Juichi YAMAZAKI

This paper is a part of the series study on formulation method of conservation planning in traditional town (village) of P.R.China. In this research, we are trying to find the relationship between spatial structure and conservation planning, which can be utilized as basis for formulating the conservation planning in traditional town (village).

In this paper, the traditional village which is not protected by protecting system because of small-scale is focused on. Taking the traditional Naxi village named Zhebo Centre village and Li Ge Village, which were carried out Improvement project for living condition and tourist development as object, space change of village and residence, and awareness of residents are researched to inspect the influence caused by these two projects. Then evaluation is carried out on two projects (planning) from the aspect on sustainability of spatial structure.

Keywords: Traditional Spatial structure, Space Change, Improvement Project, Tourist Development, Naxi

伝統的空間構成、空間変容、整備事業、観光開発、ナシ族

1. はじめに

1.1 研究の背景・目的・方法

(1) 研究の目的

本稿は、中国西南地方（重慶市、四川省、貴州省、雲南省）における歴史文化村居の保護計画に関する一連の研究の 1つである。本稿は、中国西南地方の少数民族の集落空間構造の研究と保護制度の対象外に外れた歴史文化村居の保護に関する研究の 2 つの側面をもっており、以下の研究課題を設定して考察を進めた。

①雲南省永寧郷（麗江市麗陽族自治県に位置する 15 の郷の一つ）に居住するナシ族モソ人[1][2] の集落・住居の伝統的空間構造の特徴を明らかにすること。

②近年の居住地整備事業・観光開発事業に伴う集落・住居空間の変容、住民の文化・社会制度に対する意識の変化を明らかにすること。

③上記の 2 つの事業を伝統的空間構造との関連、住民意識の点から評価すること。

(2) 研究対象の選定と調査概要

中国の西南地方の歴史文化村居保護においては、独自の文化と居住様式をもつ少数民族集落の存在が重要な位置を占めている。そこで、本稿では、特に少数民族が多く居住する雲南省の中から、独特の母系社会を維持してきた雲南省麗江市麗陽族自治県の奥地高原地帯に居住するナシ族のグループであるモソ人の伝統的な集落を取り上げることにした。

今回の研究では、雲南省麗江県政府（麗陽族の上級政府）の協力を得て、2010 年 9 月下旬に麗江県政府の和建華主席、麗江県宣伝部の熊天兵部長、永寧郷武装部の熊世軍部長（モソ人、地元に居住、30 歳代）とともに予備調査を進めた。調査の第一段階では、集落別マソ人の比率、農業従事人口の比率、収入、観光開発の時期について行政の基礎資料を入手、分析した。第二段階では、熊世軍部長の管轄地区である永寧郷の主要なモソ人の集落の予備調査とヒアリング調査を行った。その過程で、近年政府の指導の下で、①居住環境の向上・生活の近代化への対応を目指した居住環境整備事業（以下、整備事業と略す）、②自然環境・民族文化の保護及び観光業の発展を目指した開発事業（以下、観光開発と呼ぶ）が進められ、伝統的集落の保護が急務の課題となっていることが分かった。

上記の予備調査結果を基に、本稿では近年居住地整備事業を導入した者跋中村と、観光開発事業を導入した里格村を研究対象に選定して本調査を進める。調査方法について、者跋中村と里格村において、全戸（者跋中村 27 戸、里格村 30 戸）を調査対象に、家族構成、伝統的集落・住居空間に対する認識、主要な生業と生活方式を
めぐるヒアリング調査。事業の実施で住民意識の変化についてのインタビュー調査（インタビュー調査はそれぞれ20戸）のほか、集落・住居の平面の記録を実施した。その際、集落の平面調査について、郷政府からの見解平図をベースに、近年の変容をした部分を記録し、モデル図を作成した。住居の平面調査について、敷地構成と主屋の構成を実測し、空間の変容を記録し、モデル図を作成した。住民が不在の場合は、近隣住民にアリングを行った。

1.2 既往研究の動向と本研究の特色

本稿の研究対象とする少数民族は、一般的にナショナリズム族と呼ばれる民族の一つである「モソ（摩梭）人」である。モソ人は、東部ナショナリズム族と大別されることがあり、雲南省永寧区、刀県、白銀、隴川などで生活している。モソ人は、現在でも母族社会の伝統が維持されており、世界中での学者の関心を集めている。またその家屋形態は、畳木式（校倉造）民家として独特の形態と構法をもっている。

既往研究では、主に民族学研究での生活習慣や社会環境、人類学研究での生活様式について、ナショナリズム族社会文化、伝統文化、芸術の発展、母系社会の生活習慣の精緻な研究成果が発表されている。

建築学分野では、1980年代以降、ナショナリズム族の特有の居住空間、及び母系社会の日常生活との関連性が取り上げられ、「雲南省民」（1986年版、2002年版）等の著作が刊行された。日本では、浅川滋男らによって1990年代に雲南省・福井県の住居について現地調査が行われ、その成果は『住まいの民族建築学』（1994年）、『雲南省ナショナリズム族社会の居住様式と建築技術に関する調査』（1996年）として発表されている。また井上えり子はナショナリズム族の伝統的住居に関してその特徴を明らかにしている。

これまで、モソ人の社会文化・生活様式や伝統的民家に関する研究の蓄積は多いが、集落を対象とする研究は十分とはいえないと考えられる。

中国では国土全域における経済成長、都市化が急速に展開しており、中国西南地方の少数民族集落でも同様である。それに加えて、新しい伝統的な集落景観、自然景観を残す少数民族の集落の観光化、近代化に対する対策も求められている。このような状況にあってモソ人の歴史文化財の保護研究はようやくスタートした段階といえる。

2. 研究対象地域の概要

モソ人が居住する雲南省永寧郷は（図1）、湖区（写真1）と隣接（写真2）に区分され、そのなかにさらに6つの行政村、72の自然村に分かれてある。永寧郷には呂氏の原発源地であり、雲南省の自然環境が残されているため、1986年に第二次の国家級自然風景名勝区に指定された。また、モソ人の居住地として、独特な社会文化、美しい伝統的な集落・住居の形態が残しており、中国でも有名な少数民族集落の1つと認識されている。

湖区では、1980年代末に観光化が進むに従って、住民が自発的・無計画な開発を進めてきた。そのため、伝統景観が失われ、観光業の水準も低下するという問題が生じている。それに対し、2005年より観光業管理委員会と永寧郷政府が里格村を対象として、本格的に観光業の発展を推進する観光開発事業を導入している。

現在、里格村には30世帯が住んでいる。かつては農業と漁業を主な生業としていたが、最近は観光業が中心にかわっている。観光開発で他民族の経営者を参入もみられるようになっており、モソ族以外の民族と通婚する住民も現れている。その結果、妻異族（走婚）とも呼ばれる[12]と一方・婦人と両方が存在し、社会文化への影響を表している。更に、観光開発によって集落・住居空間が変容のある。

一方、湖区は、観光化が進んでおり、伝統的な農業・牧畜業が生活様式が維持されてきた。しかしながら、2000年代初期から、永寧郷政府の指導の下で者波中村をモデルに、住民の生活を改善することを目指した集落・住居の整備が行われ、集落・住居空間が変化している。

者波中村は、かつて永寧区を司った領主（土司）が居住していた中心集落であり、今も湖区内では経済的な活気の集落（平均収入は約2,300人民元/年、農業人口は26％）となっている。集落は、27世帯が構成され、住民は全て妻異族である。

3. 整備事業による者波中村の住居・集落空間の変容

3-1. モソ人の伝統的な住居・集落空間の特徴

今回の現地調査では、全27戸の住宅プランを採択し、住居者は改修の呼称、使い方についてヒアリングした。また整備事業導入前の住宅や住まいの変容についても調査した。

以下では整備前の者波中村の伝統的な住居・集落空間の特徴を整理する。

（1）伝統的な住居空間の特徴

住居空間について、家族人数が安定しており、改修・改築も少ない。
ない伝統的な住宅の典型例として 1920 年代に建てられた巴塔の住宅（図 2－②）を例にその特徴を整理した。

図面に従うと居住者ビアランフから、モソ人の居住空間の最も重要な特徴は、神・人・畜が共存していることであり、住居内に信仰・生活・生産の場所が隠しに重畳していることがわかった（図 2－①）。この特徴が伝統的なナシ族の住居空間を維持されているか否かを判断する主要な基準となる。

畳木造以外の特徴とするナシ族住居の配置は、主屋（写真 3－①）、経堂（写真 3－②）、居室棟、畜舎が庭に囲むことになっている。経堂は敷地の神の居所として、信仰に関する活動と家族が行う場所である。同じ庭、庭、居室棟は人の空間であり、日常生活の主要な場所となっている。畜舎は畜の空間であり、住家に隣接する庭園とともに生産の場所となっている。

モソ人の住居にとっては最も重要な空間と考えられるのは、家族と犬を象徴する祖母が住む居家のなかの主室である。ここでは、家族の日常生活（食事、囲らん、接客）が営まれ、成人式や祭り等の重要な儀式を行う場所である。主室の内的構造は、祖母と未婚者の子供の寝室と家族の活動場所をなす主室、及び主室を囲む上室、下室（男性の寝室、収蔵、炊事）など、後室（収蔵、臨時の仮住居など）；前廊（主室と部屋の緩衝区域）の 4 つの付属部分を持っている。主室には儀礼（成人式等）のときも使われる男性、女性や囲炉裏；祖先崇拝や火の神の祭壇があり、象徴的な存在となっている。十分な資料はないが、主室の細部の配置には、前・後・上・下の接合部がつく部屋があることから空間の位置関係、秩序の存在が伺われる。

居住者は、成人した女性には家族（花嫁と漢語では表記する）が与えられ、走婚の相手を迎え入れる。男性にも個室が与えられる場合もあるのが確定ではない。

以上を総括したモソ人の伝統的な住居空間のモデル図を図 2－③に示した。

（2）伝統的な集落空間の特徴

ここでは、モソ人の集落構造の特徴、空間構成、住居空間と集落の関係に着目して考察する。

集落の立地について、今回調査した 10 箇所のナシ族集落は、全て山裾に位置している。圏域出身の熊武部長と、このような立地の特徴は、モソ人が山と神を見なすこと、山裾で防衛機能が備わっていること、山による生活生産材料の獲得にも平野の生産用材の確保にも意義があることが主な原因ということだった。

信仰空間や共用空間に着目すると、集落の空間構造が理解できる。これの集落の特徴は、山と神のシンボルとなっているのがモソ語で「ガム」（ガム）女神山よばれる集落背後の山である。格姆女神は、集落創生にかかわる伝説の女神であり、その名称から場所の意味と価値が理解できる。因みにこの山の漢語では「獅子山」と呼ばれている。この山は、モソ人の自然崇拝、女神信仰の対象であり、7 月 25 日には「転山節」という山の神を祀る祭りが盛大に行われている。

また集落の出入り口や住居のまわりの結節点と主要道路の交点にはラマが立地している（写真 4－②）。ラマは、神聖や経文や模様を刻む石で積み上げられた塔型の宗教信仰的意味を持つものであり、様々な大きさがある。ラマと周りの空き地から構成される空間は、格姆女神山と並ぶ集落の神聖領域＝信仰領域といえる場所である。

以上のように山裾に立地する者波中村は（写真 4－①、図 3－①）、北は者波上村、南は者波下村と隣接しており、左側には集落の共有地である牧場と農地が広がっている。集落の者波中村は、主に住居が立地する居住区分、農業・林業・牧畜業を行う生産区分、主要な交通路を分する 4 つのラマ場（写真 4－②）と周辺の空地、自然崇拝のシンボルとなっている格姆女神山から構成された信仰領域として捉えることができる（写真 4－③）、また集落前方に立地するサークル状の広場、共同牧場も共同空間である。

熊武部長によると、モソ人の集落空間の特徴は母系社会の家族構成、伝統的住居の空間特徴と関係があると考えられる。母系社会の家族構成は庫利である祖母を中心に、全員が同一の母系の血が繋がっている。このような母系家族は 1 つの住居に居住しており、規模がいくら大きなくても、家族から出る或いは家族を分けて新たな住居を建てることが許されていない。そのため、家族を分かれる父系家族ではなく、家族も住居も独立性が高いと考えられる。また、増殖用地の確保、火災時の避難を防ぐための空地が確保されている。住居を建造する時に、予め住居の間隔を離すことで、個々の住居の独立性が更に強化されることになっている。

写真 3 伝統的なナシ族住居の空間（巴塔の家）

写真 3 伝統的なナシ族住居の空間（巴塔の家）

写真 3 伝統的なナシ族住居の空間（巴塔の家）

図 2 伝統的なナシ族住居空間の分析（巴塔の家を例に）
以上のよう、ナシ族の伝統的な集落は山裾に立地し、主に住居区域、信仰区域、生産区域の3つの区域から構成されていること、家族を単位とした住居空間の独立性が強いという空間的な特徴が指摘できる（図3-①）。

3-2. 整備事業に伴う者波中村の集落・住居空間の変容

（1）整備事業の内容

2000年代初期、永寧郡政府の指導のもとで、居住環境向上に加え、住民の生活を充実させることを目指した居住環境整備事業が開始された。尚、上記の事業・計画を実施するために、施設費は公共部分については市の負担、住宅や随時分譲の基礎や住宅の改修、新築等は個人負担となっている。市民への土の電気や宅地整備に

（2）集落空間の変容

図3-①には、事業後の集落空間の変化を示した。集落の整備は、2つの住居群の中間、集落中央にある空き地が対象となり、新たに公共区域が整備されることになった。この公共区域では、伝統的な集落空間の3つの区域の構成を維持したうえで、生活面での近代化や、集落としての共同活動にも対応するよう施設整備が進められた。ここには2軒のレンガ造の家（写真5-①）、4棟の和図書館（写真5-②）が新築・改築され、バスケートボール場（写真5-③）と踊り場が整備された。

（3）住居空間の変容

整備事業によって、敷地内の建物配置と主屋の室内空間が変容した。ここでは、随分の住宅（1940年代建設、2002年改築）を例に説

写真4 整備後の者波中村の集落空間の特徴

写真5 整備事業による者波中村の空間変容

図3 者波中村の集落空間の変容分析
②主屋の室内空間の変容

図4-②に整備事業後の住居空間のモデルを示した。

室内空間の変化は、主屋の採光向上のための改修が多い。利用度が低かった主屋の後室を取り払い、後室の扉を窓に改修した事例が多い（15/27例、図4-③b）。

この改修では、後室は行事（主に葬儀）にとって意義があることに配慮し、行政の制約の下での整備が行われなかった。村幹部の家をモデル的に改修し、その利点を住民に見せることによって、住民が自発的に改修を促すという方法がとられた。

４．観光開発による里格村の集落・住居の変容

４－１．開発前の里格村と保護開発計画の策定

（１）開発前の集落空間構成

開発前の里格村（2003年）を写真7、図5-①に示した。里格村は、着名村の山を隔てて南側に位置している。

集落の南に位置する湖は、モソ語で「シナミ（母なる海）」と呼ばれている（漢語では「淵溝湖」）。北に位置する山は、「格 автом（ガム）女神山」であり、着名村の信仰とされている。湖も山も、モソ語の言葉には信仰や伝説に関わる意味がある。

集落の空間構成は、居住区域、信仰区域（三つのラマ堆がある）、生産区域（農地を主とする）の三つの区画と行政用建物（4軒）のほか、民宿、飲食店といった観光施設が立地するエリアから構成されていた。

住民へのヒアリングによると、開発前の里格村の主な収入源は農業であり、観光業は副収入であった。観光業の事業が導入される前にには、観光関連施設の殆どは住民が自発的に建てたものであつた。

図5-②は、2003年当時、開発前の里格村の空間構成を模式化したもの図である。既存の三つの区域を基本に、山脈に伝統的な住居が維持され、湖岸部分では住居が拡張されるかたちで周辺に増築された観光関連の建物が立地していた。

（２）清華大学の集落保護開発計画案

2004年に永寧県政府と瀬溝湖管理委員会が清華大学建築系、天地都市建築設計有限公司に依頼し、自然環境保護、観光開発を主にナハ族文化的保護にも着目した集落開発計画と住居設計案を策定した。この計画案は保護と開発という課題に対する回答案という性格をもつもので、県政府によって実現したことが記されている。

この集落保護開発計画案の内容は以下の通りである。

①環境保護の面において、污水の排出で瀬溝湖が汚染されたことと、雨期に瀬溝湖の増水で集落が水害を被っていたことに対して、集落（湖岸部の住宅）を山側（北西側）に移転させ、沿湖を湿地に整備し、先進的に下水処理システムを取り入れることによって、湖水の汚染及び集落の水害を解決する案となっている。

②湖岸部分の住居移転は、湖岸の自然保護の面が重視された結果と見なせるが、伝統的な集落・住居空間や伝統的景観を崩す結果に
なかった。移築された住居は、伝統的なナシ族の住居の特徴を継承する配慮がなされているが、観光に重きを置いたものに変化している。

③観光開発の面において、観光施設を一体的に設置し、湿地と集落の境界に沿って遊歩道を整備した計画となっている。また、行政・事務用建物は観光管理の機能を兼ね、設置されている。

④インフラ整備の面において、インフラ整備が進めており、観光発展に対応できるよう給排水、電力、通信などのインフラ施設が整えられ、更に、外部と結ぶ道路交通を改善し、内部の道路も整備されている。

4－2．観光開発の実施と集落空間の変容

（1）観光開発の経緯

実際の開発工事は、2004年から2009年に実施され、以下の順序で進んだ。

①住居の移転と新築

湖から離れ山側に立地していた7世帯の伝統的な住居は維持されたが、湖岸に面して立地していた他の23世帯は撤去・移転された。新たな住居は、沿岸部から山腹の方へ80mほどの場所の造地に移転させられ、新たに整備された遊歩道に沿って4つのグループに分けて住居群が建設された。遊歩道は集落の新たな主軸となる主要道路で、道に面してミセが立ち並ぶように整備された。住居は居住専用から、住宅兼家族の居室からミセを兼用する住宅兼用の居室へと整備された連結住宅へと変容した。新たな住居と観光施設の機能を合わせた住居施設群は、清華大学によって提案されたもので、23世帯の住居が新築された。

②湖水の保護

污水処理及び雨季の排水を解決するため、清華大学によって設計・建造された国内の最先端の下水処理システムが取り入れられ、二つの水処理施設も整備された。

③観光施設、管理施設の建設

住居を移転した後の湖岸区域は湿地帯として整備され、ナシ文化展示館、計画資料館、民宿などの観光施設も集中的に整備された。また、行政・業務管理施設が観光管理機能を兼ねた施設として整備され、駐車場と共に行政区域を形成することになった。

④インフラ整備。

主に電力、ガス供給、通信施設、及び観光を支えるインフラが整備・改善された。

完成後（2010年）の集落空間を模式図にまとめたのが、図6－①で、その景観を写真8に示した。

者波中村と異なり、里格村の新しい住宅は家族の居住専用ではなく、観光客の宿泊に配慮されている。また観光施設が集落中央に集中し、中心機能をもたらす観光区域が整備された。さらに行政・業務管理施設が、観光管理にとっても重要な働きを担うことから、その一帯が管理区域として整備されることになった。

開発後の里格村の集落空間は、住宅区域、観光区域、生産区域、さらに、観光区域（行政管理区域を含む）が加わった構成になった。図6－②には開発後の集落空間構成マップを示した。

（2）住居の整備と空間変容

開発前には、店舗や民宿などの営業機能を加える建築が多く立地していた住居が見られていた。それに対し、清華大学の建築者によって伝統的住宅様式を維持しながら、営業と居住機能を含む住宅が整備された。移築された23世帯の住居は、この住居案を参考にし新築された。ここでは、阿尼の家（1940年代建築、2007年移築・新築）を事例に考察を行う（図7－①）

敷地構成の変容について、経営と畜舎が消滅し、神・人・畜の空間区分の代わりに、営業と家族生活の二つの部分に区分されることになった。

遊歩道に面した元の倉庫、畜舎の位置に喫茶店と、民宿、旅行館が新たに整備され、使用機能の変化に伴い、外縁に宿を設け、階高も上げた。さらに、拡大された部屋を支えるため、従前の木造構法のほか、柱梁構造も合わせて使用されることになった。
家族生活の部分は、主に主屋と居雑居の二つがある。散らされた畜舎は小さな附属館として再建され、「人畜分離」の方法で主屋の傍に設置されている。また、衛生面での更なる改善を行い、観客に好印象を与えるため、トイレと浴室も分離され、主屋の傍に独立して設置されている。更に、伝統的民族の住居に重要な地位をもつ経堂が、居室棟に合併され、ただ一室に縮小されることとなった。

主屋について、上室、下室、後室、前廊を以て居室を囲むという伝統的な主屋の構成を持つ事例は10例（図7-①a、保存された7世帯が全てこのタイプ）あるが、後室の利用度を上げ、採光向上を図るための居室設計案の通りに、後室を主室の一部にした事例が一番多い（13/30、図7-①d）。そのほか、後室を取り込む場合が5例あり（図7-①b）、上室または下室がない場合が2例ある（図7-①c）。

以上の分析結果を集約し、図7-②に里格村の住居空間モデルをまとめた。神・人・畜という伝統的空間区分において、神・畜の空間が縮小され、人の空間、営業空間が拡大された。敷地構成は対外向けの営業と家族生活の二つの部分に区分され、経堂は居室棟に合併され、畜舎が小さくなって主屋の傍に設置された。さらに主屋の構成は、後室が主室の一部分になる傾向がみられた。

5. 住民意識の変化と文化への寄与

整備事業・観光開発を評価するために、住民の意識の変化を把握することにした。ここでは若村中村と里格村において、それぞれ20戸（若村中村27戸中20戸、里格村30戸中20戸）を調査対象に選択し、問1「事業を実施した後、居住環境と生活様式は変化があるか、伝統文化は維持されているか」、問2「母系社会、妻岡婚を代表とした社会制度（生活や文化）の変化があるか」という設問を設けインターネット調査（実施日：2010年9月21日、24日）を実施した。表1はその結果を示している。

問1（環境・生活面での変化伝統文化の維持）に対する意識について、若村中村の住民は、全て「一般（普通）」、「小さい」を選択した。その理由は、「人畜分離」や公共施設の設置で集落の空間や場所の変化は認識しているが、伝統的住居環境、生活様式行事などはあまり影響していない気がする」と答えるものが多くかった。
方、里格村では、「非常に大きい」と「大きい」が65%を占めており、「観光開発で集落と住居の空間や環境、日常生活の様式が大きく変わった」と答えている。

社会制度に対する意識の変化は、者波村の住民が殆ど「変化なし」と回答し、整備事業による社会制度への影響は少ない。里格村の住民は予想外に「変化なし」と「少し変化」を選択した住民が多く、90%を占めた。それに対して、「母系社会の生活様式が大根の恩恵のシンボルであると考えられ、そこに誇りの気持ちを持っている。開発後、主な収入が観光業から得られているので、民族のシンボルが維持されなければ、観光客への魅力がなくなった」という理由を答えた住民が多かった。この結果は、住民が意識の変化を感じているが、民族の誇りや観光収入を守るため、社会制度を維持しようとすることが把握できた。

インタビュー調査の通り、整備事業が実施された後の者波村は、住民の伝統文化、社会制度に対する意識はあまり変化していない。一方、観光開発の実施によって、里格村の住民が伝統文化に対する意識が大きく変化する一方で、社会制度を意識的に維持しようという傾向が見られる点は興味深い。

図7 開発後の里格村における住居空間の分析

表1 事業導入後の伝統文化・社会制度に対する意識の変化

<table>
<thead>
<tr>
<th>伝統文化</th>
<th>養活村</th>
<th>星宿村</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>事業後</td>
<td>0.1</td>
<td>0.8</td>
</tr>
<tr>
<td>社会制度</td>
<td>養活村</td>
<td>星宿村</td>
</tr>
<tr>
<td>事業後</td>
<td>0.4</td>
<td>0.6</td>
</tr>
</tbody>
</table>

6. 整備事業・観光開発事業に対する評価

整備事業は行われた養活村では、売店、公共活動室、運動場といった公共的施設が整備された。これからの施設は集落の中央に立地し、公共区域が形成されることになる。集落域全体の空間構成は、基礎的に文化的住居・信仰・生産の三つの地域が維持され、家族をユニットとした住居の独立性、単位性も維持されている。

住居についてはみると、居住環境の向上、生活の現代化への対応が図られ、jetaの空間が人・神の空間と分離され衛生上の改善がなされている。

住民の意識にあまり目立たず、住宅区画変更は少なく、伝統的意識は安定し維持されていると判断できる。

6-2 里格村の観光開発事業の評価

観光開発事業の実施によって、里格村では湖岸の旧住居群の撤去
と自然環境の再生、旧住居群の移転に伴う新住居化的整備、新たな観光と行政管理機能を担う行政区域（公共区域）の整備、新住居化と湖岸地域帯の間の遊歩道の整備が進められた。ここでは湖岸の自然保護に対する回答として住居群の撤去という強硬手段が取られ、伝統的な民家景観の保全については伝統型の新住宅の建設が行われた。

自然保護、民家の現代化・観光化・景観復元という目標は達成されたようにみえるが、これは既存環境の保全を前提とした新規の開発である点が特徴である。また集落レベル、居住者レベルにおいても、観光と居住が一体となった整備、特に観光優先で生活が従属している傾向がある。

住居が老朽するとき、牧畜業の衰退による畜の空間の弱化傾向が顕著に表れ、さらにナシ族住民にとって大切な神の空間（経堂）が極端に縮小される傾向にある。住民および施設構成、神・人・畜の共存空間から、観光客の宿泊や売売などの商業空間と家族生活の併用空間へと変わってゆく。

今回は、湖岸地域の住宅、すべて解体され、移転により保存するという手段は取られていなかった。すべての住宅は伝統型住宅の新築で、その結果、伝統的な民家景観を復元しようとした点に特徴がある。

湖岸部分の移転によって新たに形成された居住区の景観は、新たに建設された住居が、伝統的な外観を採用したことによって一見観客につながっているようにみえるが、それは伝統のイメージ化であり、またそれを担保する法的手がなければ明確である。

住民の意識面に着目すると、観光開発事業後、物の変化が認識される一方、伝統文化、社会制度の変化に対する認識が低い。むしろ、インタビュー調査の過程で、モソ人の母系社会を中心とする社会制度や文化に対する詩や、維持意欲が強いことが明らかになった。

6－3．保護手法の比較と評価

二つの事例の特徴を比較すると、伝統的空間構造を基礎にして整備を進められた湖岸村と、伝統的空間構造を大きく改変したリソ村の違いが明確である。

前者の湖岸村の事業は、既存の住空間、集落空間の空間構成パターンを維持するもので、居住の独立性、居住区域、生産区域、信仰区域が保全されている。住居については主に衛生面からの改善がなされ、集落では行政や生活の共用化・近代化の傾向から公共区域が整備された点に特徴がある。伝統的空間構造の維持、住民意識の変化をみつつ、この事業の成果は評価することができる。

後者のリソ村の事業は、湖と湖岸の自然保護が優先され、民家の伝統的景観の形成が図られたが、既存の住宅の保存や集落空間の伝統的な空間構成は配慮されてなかった。湖および湖岸の自然保護は達成されたが、湖に住む人々の湖との関係は大きく変容した。また湖岸の伝統的な住宅は保存されず、伝統的な住宅デザインをもつ民家の復元的景観となった。当時伝統的集落の保護、建築の外観や集落景観の保全が重視されたが、結果は、集落・住居空間や室内空間の大きく変化した。集落・住居空間の変化において、観光化への対応を基本に、住家は単件住宅に、集落は観光観光の遊歩道を中心に集落空間が再編されることとなった。観光化は、住民に対しても物理的変化を強く認識させる結果となったが、ナシ族の母系社会や伝統文化に対する詩も同時に強められた。この点は注目に値する。

7．まとめ

本稿は、雲南省永寧県の者波中村、里格村を対象に、モソ人の伝統的な集落・住居の空間構成とその特徴、及び整備事業・観光開発事業に伴う集落・住居の空間変容と住民意識の変化を明らかにし、二つの事業を空間面・社会面での伝統文化の維持という視点から評価した。

最後に本稿で明らかになった知見、少数民族の歴史文化遺産の保護について考察を加え、まとめしたい。

①伝統的モソ人の集落・住居の空間構造

モソ人の住居空間は、主屋、経堂、居室棟、畜舎で囲む数棟構成、主室、上室、下室、後室、前廊で構成された主屋構造に特徴が存在した。また神の空間（経堂）・人の空間（主屋、居室棟）・畜の空間（畜舎）が共存し、信仰・生活・生産の機能が住居内の基本的な空間構成に対応していることがわかった。

モソ人の集落空間については、自然沿革・信仰の対象となる山（女神山、獅子山）の再評価に立地し、居住・信仰・生産の3つの区をベースに集落構成が形成されていること、居住者は、母系家族に対応する従属性の高い住居空間に隣接する雑穀、空地によって構成され、集落の出入り口や中心の大事な道ラマが建立し、秩序化されていった。

②事業に伴う集落・住居の空間変容とその評価

者波中村の整備事業では、集落空間に公共区域が形成され、住居空間に人畜分離が進んでいるという変化が明らかになった。ここでは従来からの集落の居住・信仰・生産の3つの基本的な区域や住居における家族をユニットとしての空間の特徴、住居の神・人・畜の空間共存関係も維持されている。また空間変容が進む中で、住民の伝統文化や社会制度である詩や、意識の変化から、今では住居の生活空間の近代化に伴って、集落の変容が進む中で、民系社会の維持、モソ人の文化に対する詩や意識が強まる傾向があることが明らかになった。

一方、里格村の観光開発事業では、湖岸に立地していたすべての住居がモソ中村に移転（新築）され、湖岸の自然環境が再生・保護された。ここでは従来の集落の空間構造が改変され、新たな住居空間に伝統的な形態・外観の住宅が構成され、主要道もアスファルトとして整備された。集落の伝統空間構造も大きく変容し、住居レベルでも、道に面する家族用の居住棟は客室、ミソの観光会へと変化した。また経堂が一室に縮小された事例もあり、神の空間の弱化ははっきり表れている。観光化の進展と住居・集落空間の観光軸を軸とした整備、変容が進む中で、民系社会の維持、モソ人の文化に対する詩や意識の強まる傾向があることがわかった。

③少数民族の歴史文化遺産の今後

二つの事業の比較から、少数民族の歴史文化遺産の保全において、集落と村が多い、省と省の連携システムの確立が急務である。また観光の保護計画の策定、整備事業の進展、その後の管理・運営において住民および地域の参画とその組織の整備が重要である。それは、空気にも社会的にもまちもの単位となっている村（集落）組織の育成・活用が重要である。

その際、生活の現代化、居住環境の向上、観光化への対応といつも直面する問題を解決し、同時に独自の文化や社会制度の維持、集

－381－